

段階的な教育相談の連携に コンピュータおよびそのネットワークを活かす

伊勢原市教育センター

永山満夫

nagaman@air.ne.jp

1. 概要

伊勢原市教育センターの教育相談部門には、主に次のような相談形態がある。

- (a) 「電話による相談」「学校訪問による相談」
- (b) 「家庭訪問による相談」
- (c) 「来所による相談」
- (d) 「適応指導教室による相談」

現在、伊勢原市には不登校で月7日以上欠席している児童生徒が約70人いる。このうち相談員8名が(b)~(d)に継続的に関わっている児童生徒数は、約40名、うち適応指導教室には10名程通室している。

学校に行けない不登校児童生徒達だが、他人との関わりを全て拒んでいるわけではない。相談員によると、むしろ人と関わりたい欲求を持っているのだがうまく関われない子どもが多い、という。少なくとも、相談員との会話が成立するのであれば、子どもたちの間からも、コミュニケーションの糸口を探ることができるのではないかと。そのコミュニケーションのためにコンピュータが何か役立てるだろうと考えた。

2. この報告事例の平成10年4月の状況

(1) 主たる相談者(小4、男(現在小5)): A

幼稚園年長より登園せず。小学校は入学式に1日出席したのみで、第3学年末まで全休。要因と思われる出来事についての特定することはできなかった。平成9年10月より訪問相談を開始し、半年後に相談員の車で、**教育センターに来所**できるまでになっていた。

(2) Aと出会う相談者(中1男子(現在中2)): B

学校は全休。**適応指導教室に通室**し、ほぼ出席。コンピュータリテラシーには目を見張るものがある。自宅ではホームページを巡り、教室でも3Dを操る程だが、周囲の人と共に使う姿はあまり見られなかった。

(3) パソコン設置状況

教育センター：研究用パソコン1台

インターネット接続なし

適応指導教室：児童生徒用パソコン2台
インターネット接続なし

それぞれの場所は、徒歩で30分程度の距離にある。

3. 仮説

段階的な教育相談の連携に、コンピュータおよびそのネットワークを活かすことにより、不登校児童生徒が、「人」「物」「自分」と出会い、集団生活、学校へと踏み出すことへの援助ができるだろう。

- (1) 学校復帰をねらいに相談者の成長を考えた場合、先述の(a)から(d)の順にたどるべきかどうかには、ケースにより議論がある。が、このケースでは、次のようなことから主たる相談者Aの(c)から(d)への展開を図る事が適切であろう。

・Aが在籍する小学校では昨年4月に登校への好機となる事情があり、それを生かそうとしたが、時期尚早であった。次の機会まで、在籍校と連携をとりながらも、他や集団になじむための家庭以外の場として適応指導教室で段階的な成長を図ることが適切である。

・適応指導教室見学时に出会ったAとBに意気投合する様子が見られた。それは特定の趣味について話題が共通するといったものではなく、生活の中の共同作業を通して見られたものであった。Bの存在が、Aを適応指導教室通室にその気持ちを向かせることができるだろう。Bにとっても、Aの存在が適応指導教室での集団生活をつくることになる。

・Aは小学生、Bは中学生と年齢差があるが、同じ中学校区在住。この年齢差と共通点を効果的に作用させることができるのではないかと。

- (2) コンピュータやコンピュータネットワークが、次のような理由により効果的に機能するだろう。

・平成8年伊勢原市教育センター小学校コンピュータ検討委員会「児童の体験とコンピュータに関する調査」(<http://www.ny.airnet.ne.jp/icec/comp/research/pup11.html>)によれば、90%以上の小学校高学年の児童が

「学校や教室にパソコンがあったらよいと思う。」と答えており、子どもたちのほとんどはコンピュータに興味関心があると考えられる。Bはもちろんのこと、Aもそのひとりであった。

・コンピュータを利用することで培われたリテラシーが、学校復帰への大きな障壁である「読み書き」の学習の遅れへの不安を緩和することができる。また、過渡期には、パソコンが、教科書・ノート・鉛筆との緩衝剤にもなるであろう。

・とかくバーチャルな世界が体験不足につながると言われがちだが、意図的に使うことでパソコン体験も貴重な体験のひとつとなりうる。さらに、それ以外の実体験を促すための手段として有効に機能する。

・ネットワークでの出会いは、見知らぬ人、あるいは知り合ったばかりの人同士の心理的距離を適度に保つ。その距離は実際に対面し出会った時に一気に縮まる。

4. 方法

(1) 対応する相談員

- ・訪問相談員：T u
- ・来所相談員：T h e
- ・適応指導教室担当：H
- ・情報教育担当：n m

(2) まずスタンドアローンパソコン環境で

教育センターでは、研究用パソコンを利用。適応指導教室は、既存のパソコンを利用。

それぞれの場所で、個別指導にパソコンを活用。例えば、R P G作成、お絵かき、音楽作りなど。まず個別に相談員との関係づくりからスタートするため、あえてスタンドアローンでの利用期間をもうける。

(3) スタンドアローンからネットワークへ

相談室に相談専用の自作パソコンを設置。自分が使う道具を自ら作ることで愛着が持てるよう、また自分が作ったパソコンをここを訪れる多くの人達が使ってくれることを願い、Aと相談員が共同作業でパソコンを作り、インターネットに接続。Aには、興味を持ったことが調べられる検索機能を紹介する。

同時に、適応指導教室については、Hと、Bにメールを含め、その管理の一部を任せる。掲示板に興味を持ったBと、ホームページ上にどこからもリンクされない掲示板を設置。チャットでも良いが、「更新」を意図的にすることで自ら関わろうとする姿勢が大切、1行のチャットよりもひとまとまりの文章を扱う意図で掲示板を選ぶ。関係者以外にはそのアドレスを知らせない。これによって、メールと掲示板による教育セン

ターと適応指導教室との間のみのパソコンによるコミュニケーション環境ができる。

相談員は、お互いの関係が自然に生まれ、適応指導教室をその場に出会おうと期待する気持ちを育てるよう努める。

5. 結果：Aを中心とした相談の経過

(1) 平成7年4月～ 相談回数 0回 / 2年半

出席は、入学式1日のみ。いわゆる閉じこもり状態。

(2) 平成9年10月～ 18回 / 半年 家庭訪問

この年、文部省委託事業「登校拒否訪問相談事業」（後の「不登校訪問相談事業」）が始まった。

午前中寝て、午後は、時々近所の年下の子どもと遊ぶAを訪問相談員となったT uが、午前中に家からの外出を図った半年間。外出にはかなりの困難が見られ、保護者との面談、釣り、勉強、料理、造形など、辛抱強くさまざまな媒体で接触を試みた。ふとんにもぐり、またトイレ、手を洗いに頻繁に行くAにT uは専門医への相談の必要性を保護者と話し合ったこともあった。

そんな中で、「ゲーム」「パソコン」にAは興味を示した。T uは、自宅の外でゲームがあり、話し相手のいる場所、T uの家族のいる自宅にAを連れていった。

(3) 平成10年4月～ 41回 / 1年 来所相談

「R P G作りをやってみたい。」ということからパソコン、およびn mとの関わりが始まる。この時期の1年間で教育センターでのAのパソコン利用は32回。「お絵かきソフト」のスタンプ機能や「R P Gマップ作り」はパソコンによる箱庭のよう。自作のR P Gには、T u演奏の音楽データをB G Mとして挿入。

T uは、陶芸、クリスマスリース作り、カレンダー作りなどの製作表現活動を通じてAとコミュニケーションを図る。n mは、パソコンで過ごす時間を担当し、作品をデジカメで残すなど、周辺機器も活用した。

平成10年10月、教育センターは公式にインターネット接続を開始した。それを利用して興味を持った「飛行の歴史」「潜水の歴史」について調べ、パワーポイントでまとめた。

慣れた人の中ではなくつらい笑顔が見られる。ところが、見知らぬ人がその場にいるとそわそわとして落ち着きが無い。しかし、以前の体が震え、汗びっしょりになる程の緊張が見られたことを考えるとだいぶ人慣れた様子。T uの運転で寄り道をしながらの来所には抵抗がなくなっている。

この時期の後期には、前半1時間に将来の話を含めたカウンセリングと、算数の四則演算、漢字、ローマ字の学習が始まった。それを終わると後半の1時間をパソコンで過ごした。自分が選んだ昼食を食堂に頼み、相談員以外のセンター職員とも一緒に食事時間を過ごすことが数多くなってきた。

児童が全て下校した学校の職員室へ週1回程度、足を運び始めたのもこの時期である。

(4) 平成11年4月～ 47回/8ヶ月 適応指導教室への移行に向けて

4月23日、「相談室でみんなが使うパソコンを組み立てよう。」という計画を実施。(写真)



4月28日、Tuは、適応指導教室に熱心に通うBを伴い、Aと一緒に自然の多い日向方面を散策する。意気の合いそうなBとの会話で「適応教室に行こうかな。」とAの一言。5月7日、保護者と共に教室を見学。

5月11日、ローマ字と算数の学習後、あらかじめBとnmがメールで打ち合わせた時刻に教育センターと適応指導教室で同時に掲示板にアクセス。以下は、その後数日を含む掲示板の記録である。(注：ハンドルネームは、意図を損なわない程度に変えてある。)

記録開始

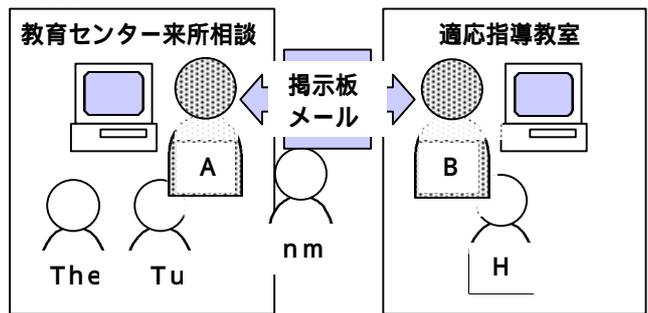
スタンバイO.K. 投稿者：nm
 投稿日：05月11日(火) 11時18分
 もし、読んだら返事ください。
 ここにいるのは、KRman、nm Tu-san です。

来ましたよ。投稿者：B 11時22分
 来ましたよ。

RE 来ましたよ。投稿者：KRman 11時29分
 はらへった。あと30分。

お、投稿者：B 11時31分
 やっと来たみたい。ところで何話すの？

今回のネットワークコミュニケーションイメージ



(無題) 投稿者：KRman 11時36分
 KRmanからB10になります。

(無題) 投稿者：B 11時37分
 BにするなBにまぎらわしい

re：Bにまぎらわしい 投稿者：A 11時40分
 じゃあ「A」になります。

(無題) 投稿者：B 11時41分
 いいんじゃない。ところで何話すの？

アメリカ 投稿者：A 11時44分
 アメリカにいたみたいだけど、10年くらい前の話だけ？アメリカのどこに住んでたの？

(無題) 投稿者：B 11時47分
 二歳半から4歳半の2年間いたよ
 (ニューヨークのセントラルパークの真ん前のアパート<十階建ての5階>だったような、)

アメリカ 投稿者：nm 11時50分
 ちなみに、私はずっと秦野から出ていない。

(無題) 投稿者：B 11時51分
 (笑)

(無題) 投稿者：A 11時52分
 僕は、3回くらい引っ越した。
 1. きおくがない(1歳)
 2. 横浜(3歳半)
 3. 伊勢原(3歳半)

(無題) 投稿者：B 11時53分
 私もその時以来伊勢原を出ていません。

(無題) 投稿者：B 11時54分
 横浜っていったい何日居たの？
 (三歳半に行って三歳半に出ている)

(無題) 投稿者：A 11時58分
横浜は、1歳半くらいから3歳半まででした。

(無題) 投稿者：B 11時59分
そうですか。

(無題) 投稿者：A 12時01分
1階と2階の建物で、その1階に住んでいた。
2階には、別の家族が住んでいた。
(つながってないけど)
いちご畑をつくっていた。

(無題) 投稿者：B 12時02分
アパート？

(無題) 投稿者：T?? 12時03分
私は誰でしょう？答えは、また次回。
昼になったので、今日はここまで。(ゲー)
私も通信できるように勉強します。

アパート？ 投稿者：A 12時04分
そうです。では、また。
ありがとうございました。通信終了

(無題) 投稿者：B 12時05分
Tu-san？

初登場 投稿者：the 12時48分
うしゃしゃしゃしゃ・・・

?????? 投稿者：B
投稿日：05月12日(水)10時07分
??????謎だ??????

うしゃ2 投稿者：the 12時54分
Bさんをちょっと混乱させてしまいましたね。
ごめんなさい。
T??とthe は別の人だからね。
T??さんは tu-san で大正解！
じゃあ、theは誰？
しばらくは謎の人で楽しんじゃおうかな^o^

????? 投稿者：B
投稿日：05月13日(木)10時11分
?????誰なんだー?????

ひみつ 投稿者：the 17時33分
それは、ひみつ。ヒントとしては・・・
<その1> Bさんとtheは会ったことがあります。

(無題) 投稿者：B
投稿日：05月14日(金)09時20分
そんなヒントじゃ分からないじゃないですか。
(会ったことがありますっていわれても、、、)

(無題) 投稿者：the
投稿日：05月17日(月)09時48分
あたりまえじゃ。
すぐにわかるヒントじゃつまらないからね。
ヒント<その2> “the”っていうハンドルネーム
には私の名前のイニシャルが含まれてます。
全然関係ないアルファベットもあるけどね。

(無題) 投稿者：B 11時07分
誰なんでしょう？

「the」って？ 投稿者：nm
投稿日：05月19日(水)10時49分
おはよう、Bさんへ大ヒント：
1. まわりのおとなの人が、教室のみんなに
聞いてみましょう。
2. http://www.ny.airnet.ne.jp/icec/****/****
この中のひとりです。わかったかなあ...？

(無題) 投稿者：B 11時28分
分かったけど確信が持てない

(無題) 投稿者：T?? 11時42分
おはよう。Bさん。T??です。
いまAちゃんと勉強をしておわったので、
遊んでます。来週の宿泊学習会にはT??も
Aちゃんと一緒に参加させてもらう予定です。
ウキウキ。そのときは、よろしくお願いします。

わかったかな?? 投稿者：the
投稿日：05月19日(水)19時19分
nmさん、大ヒントすぎる！
Bさん、確信持ってよろしいかと思います・・・
イニシャルに t と h を使う人って、
センターでは一人だから。
今日は、Aちゃんがセンターの日だったので
一緒にごはんを食べました。Bさんの好きな
食べ物、嫌いな食べ物は何ですか？
記 録 終 了

5月31日、学校に行っていないBが、「明日学校の
遠足に行って来ます」と掲示板に書いた。その鎌倉
遠足後、「北鎌倉」から「由比ヶ浜」までの見聞録も含め
60通を越える掲示板でのやりとりが続いた。

Aは、6月に自分の作ったパソコンにグラフィック
ソフトを使って、自作エンブレムをつけた。これでま

すまず愛着を持って使うことだろう、と期待した。しかしこの8ヶ月間、彼が教育センターのパソコンを使うことは14回にとどまった。それは、42回の相談のうち、28回を適応指導教室の活動に体験入室として足を運ぶことになったからである。

Aは、春休みに民間の体験学習に参加し、多摩川を36Kmにわたり歩いてきた。自信をつけひとまわり大きく見えるAは、この掲示板のやりとりの後、5月「日向ふれあい学習センター」での1泊2日の適応指導教室宿泊学習会に参加し、Bとの仲をさらに深めた。この8ヶ月間にさらに3回の同様の宿泊学習会への参加を経たAに、保護者と学級担任、Tuは、11月の学校キャンプへの参加の可能性を感じ始めた。学級の数人の児童は、放課後たまたまやって来るAを待って一緒にキャンプの冊子作りをした。そしてAは、一泊二日の学校キャンプに参加した。

(5) 平成12年1月～ 11回 / 1ヶ月 適応指導教室正式通室

年が明け、Aは適応指導教室に正式通室を開始。週1回、Tuは教室へAを送っているが、「週にもう1日、自分で行ってみたい。」と言い出した。1月中、nmは来所するAの姿を一度も見なかった。この11回の相談回数は、全て適応指導教室への出席日数だからだ。

Bは、「nmさん、掲示板の作り方教えてください。」の書き込みを最後に、自分のホームページに掲示板を作ってしまった。その掲示板にはもう相談員の書き込む余地は無いだろう。

作りかけのRPGと掲示板は、今ひとまず休息中で更新されていない。一時期の役目は終えたようだ。

(6) Aの相談形態とその回数の変化

(平成9年10月～平成12年1月)

	家庭訪問	来所相談	適応指導教室
H 9年度	17	0	0
H 10年度	1	37	0
H 11年度	0	24	39

合計118回(うち来所時のパソコン使用46回)

6. 考察

この取り組みは、さらに長期的展望が必要であろうが、日々の結果を見ながら次の構想を練る相談員の仕事のわずか一部でも担えたのではないと思う。

初めにAは、ゲームに興味を持ってパソコンに接した。nmは、ゲームをするだけでなく、ゲームを作ることで、この新しいパソコン体験から、さらに発想も

楽しみも広がり、見えてくるものがあるのではないかと期待した。「ストーリー」「マップ」「キャラクタ」作りがある「RPGツール」というソフトは、その可能性を感じさせた。が、彼は、ストーリーを持った展開でゲームを完結するには至らなかった。やや難しい課題だったかもしれない。しかしマップ作りは、興味を持って何度も繰り返し描いたり消したりした。これをどう解釈すべきかわからぬnmは、箱庭療法について学ぶ必要を感じた。

その後、インターネットでの検索、パソコンの自作、掲示板での会話と取り組んだ。Aは過度に依存するのではないかと心配された程のめり込まなかった。それは「体験」という程の適度なものであったろう。掲示板と対面しての出会いもバランス良く、直接の出会いを楽しみにするようになっていった。

適応指導教室での学習がパソコンを使わずに始まっている現在、学習への抵抗緩和のねらいとして、さらにパソコンやネットワークとの関わりに比重を置いた相談を継続する事については、今後の通室の様子から次の判断を待つ。今、Aはローマ字の学習をしているようだ。例えば、それがフィードバックされ、自らキーボードに触れる日も近いかもしれない。

それ程のめりこんではいなかったにも拘わらず、パソコンを楽しみに来所できたのは、将来何か役に立つ事を感じさせるおもしろい道具に触りながら、そこで過ごす人達との心地よい時間があつたからだと思う。訪問相談員は、Aがパソコンでマップを描いている姿を眺めながら、あるいは声をかけながら個別プログラムに頭を悩ませ、本人はもちろんのこと、保護者や学校との相談をし、耳の痛い言葉を出さねばならない仕事も担ってきた。来所相談員は、専門知識の提供と相談員同士の連絡調整、そして教育センターすべての職員とともに、相談者の来所時にはできるだけ心地よく過ごせるように努めた。適応指導教室担当は、既に通室している子ども達との関係に配慮し、安心して通える所であることを理解できるよう伝えた。たまたま関わった情報教育担当は、「パソコンおたくのお兄さん(おじさん)」として、楽しいところだけ参加させてもらった。コンピュータは、「ハード」「ソフト」「ネットワーク」そして「サービス」へと何十年もかかってその市場を変えてゆきつつある。まさに「サービス」とは「人」を表している。パソコンは、相談者の体験を広げ、来所相談から適応指導教室への移行と、出会いの場を作る道具として働いたと思われるが、やはり欠かせないのはそこに関わる「人」であった。

2月17日夕刻、AとBは、適応指導教室に通室するもうひとりと3人で教育センターを訪れた。「教室からここまで歩いてきたんだ。用事はないけど。」と。

外出への抵抗は薄れつつあり、気の合った仲間とも

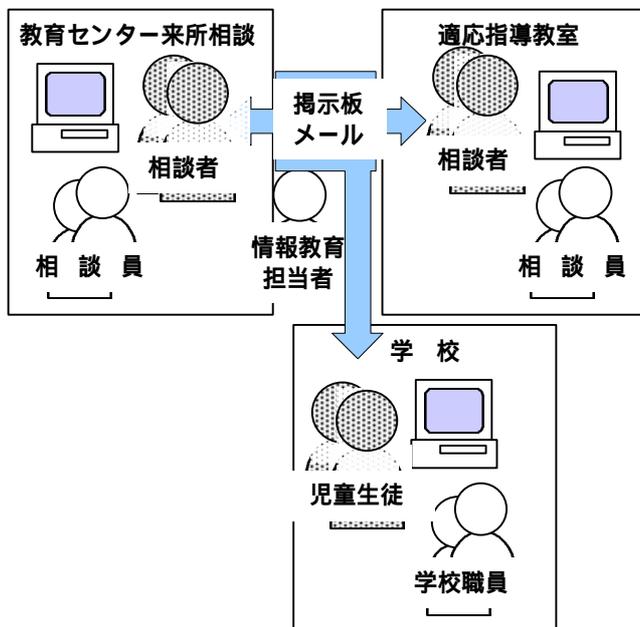
出会いつつある。「学校へ」は結果としての副産物であり、初めからそれを求めるべきではない、との考えもあるが、Aのケースでは「学校復帰」をねらいのひとつとして期待している。その道は、勉強への不安もあり、行きつ戻りつしながらまだ長いかもしれないが。

この4月にBは、中学校第3学年に進学する。そしてAは、小学校第6学年に。その1年後、Aが同じ中学校に進学する時、Bは卒業する。そこまでの期間をどう過ごすか、中学校への橋渡しには、さらに新しい出会いが必要となるだろう。

7. 今後の課題

使い方によって適度に距離を置けるこのコミュニケーションツールには「他の子どもたち」「学校職員」との関わり」が、次に期待できそうである。

ネットワークコミュニケーションのイメージモデル



と考えていたところに、最近新しい動きが見られた。

適応指導教室のメールはリモートアクセスにより、nmが管理している。nmはメールを全て読めるし、必要とあらば、手助けメールを出したり、使用不可にせざるを得ない事態にも対応できるようにしている。これは、教室の職員、児童生徒にも周知の事である。

適応指導教室職員用にと用意したメール機能であったが、児童生徒が先に使い方を覚えてしまったようである。中学生の女子Cが、自宅から適応指導教室宛に出したテストメールが私の目にとまった。

その後、手作りのクッキーを在籍校の学級に届けたC宛に、学級の生徒達からお礼のメールが次々に飛び込んできた。在籍校の生徒からメールが届いたのは、初めてのことであった。Cも返事を出している。

さらに、その学級担任からのメールも届いた。これを機会に教室の担当者との協議しながら学校との関わりをさらに深めることはできないだろうか。とりあえず担任教諭には、教室宛にメールをいただいた事への謝辞を述べ管理上のシステムを説明するメールを出した。

AやB、Cを含めた適応指導教室に通室する子ども達の中に、このような次の展開にパソコンがまた働いてくれる可能性がありそうである。

さて、適応指導教室の児童生徒達は、第三者とのメールや、外部掲示板へのアクセスも始めている。情報倫理、個人情報、有害情報と情報化の影の部分が心配される。昨年、大阪で開催された『インターネットと教育』フォーラム』では、「児童・生徒全員に電子メールアドレスを発行すべきか否か」が議論になった。現在、適応指導教室では、ひとつのアドレスを皆で共有しているが職員用アドレスは別に必要であろう。利用上の留意事項もさらに考慮する必要がある。

8. 最後に

教育相談には、情報教育とは違った「研究を共有することの難しさ」を感じている。より理解を得ようとするればより詳細なデータが必要である。しかし、現在継続中のケースではなおさらのこと、個人情報の保護、守秘義務により提供できないデータが多い。何をもちて成果を計るのは、より感じる力を要求される。そこには「教育は国家百年の計」と相通ずるものがある。

そして、情報教育の担当は、ハードやソフトだけに終始してはならないとあらためて思う。パソコンを「道具」として見た時、道具を生かすためには、それが使われる分野の知識が必要である。その分野の担当者、専門職との相互理解無くしてはやってゆけない。

この事例報告は、情報教育担当者が関わった領域の視点からのものなので、教育相談の報告としては不十分な点が多いだろうがご了承願いたい。またその専門分野からのご意見をいただければ幸いです。

日々ご尽力されている保護者の方々、学校職員の皆様、そして相談員の方々に敬意を表し、このような機会や報告にあたって貴重な情報、アドバイスをいただいたこと、そして子ども達との出会いと彼らの成長に本当に感謝している。

使用した主なソフトウェア

- RPG ツクール 9 5 (ASC)
- 音楽ツクール 9 5 + (ASC)
- Microsoft Power Point (Microsoft)
- MiniBBS (ネットサーフレスキュー：
<http://www.rescue.ne.jp/>)